

日本語を教えてみてわかること



もう何十年前のことになったのだろう。まだ高校生のころ、歌舞伎座に行ったときのことである。後ろの席に外国人が数人いて、聞くとともに耳に入ってきた通訳の言葉に愕然とした。その人は英語は確かにうまかったけれど、内容を全く伝えていない。歌舞伎についてなんの知識もない。いくら言葉がうまくても文化を理解していないのだ。その格差に気がついてから、大げさなようだが私は、外国語の勉強より、まず日本語・日本文化の勉強が先だと痛感した。大学の国文科に進み、日本文学史を専攻した。どうもこのときがわがライフワークの起点であったようである。

次の転機は就職後、知日家といわれる日本学者たちとの交流であった。彼らの流暢な日本語にもしばしばつまずきがある。なぜか？という疑問に何度も突き当たって、私は日本語教育の世界に入る決心をした。以来四十年、ついに私は一生この道から抜けられなくなったようである。

それはなんなのか、複数ある答えの中から一つをあげれば、外国人に教えることを通じて、日本語を、日本文化を毎日再発見する、この仕事の新鮮さの虜となつてしまったからである。

今、私はもう教壇には直接立たなくなったが、スピーチコンテストや作文コンクール審査員をすることがしばしばある。そこに出てくる日本語のちよつとした誤用は、学習者の母語の干渉によるものもあるし、言葉だけを習った結果、日本文化や、日本人の価値観とのずれからきたものもある。

最近の作文の中に、「未来の夢」という題であったが、「将来は身体を粉末にして労働し、両親の期待に応えます。」と書いたものを見つけた。一生懸命字を覚え、できる限り漢字を使って書くとした努力の結果であろう。涙ぐましい間違

(社) 国際日本語普及協会理事長

にし お けい こ
西尾 圭子

西尾 珪子（にしお けいこ）

1932年生まれ。1970年、日本語教育の教育内容の研究、教師養成、教授法と教材の開発を目的とした日本語教育研究会を発足させた。その後、社団法人として認可され改称した国際日本語普及協会で、インドシナ難民の日本語教育、全国の日本語支援ボランティア養成、公開研修講座など幅広く活躍している。

光村図書が発行する日本語教科書『中日交流標準日本語』の監修者を務める。

いではないか。いや間違いではない、身を粉にして働くとは、れっきとした日本語なのである。日本語は漢字が難しいとの観念にとらわれた学習者の努力の行き過ぎが胸を打つ。

帰国児童にも日本語の問題は山積している。帰国直後の男の子に、「連れて帰ってきた犬は、日本に来てバウワウと鳴く。ワンワンなんて言わない。」と言われて、母親が困惑していたのを見たこともある。

ドイツ人のビジネス関係者に、「明日の出張には荷物をたくさん持って行きませんか?」と聞いたところ、「いいえ、二モツではなくて、一モツだけ持って行きます。」と答えられた。モツは日本語独特の数詞の一つと思い込んだのであろう。

最近は日本定住者が増え、日本社会に適応するために第二言語としての生活日本語を学ぶ人が激増した。日本人の生活文化そのものの学習が必要になった。朝晩の挨拶から、電話のかけ方、道の聞き方、ゴミの出し方まで、切実な学習項目になった。

半年ぶりで会った学生に、「あ、この間は失礼した。」と言ったら、「えー、それは何月何日のことですか?」と聞かれて、挨拶の表現にも文化の違いがあることを改めて認識したこともある。

ところで、最近は日本人どうしても異文化を感じる場合が多くなった。レストランに入ると、「こんにちほ。こんにちほ。こんにちほ。」と一人の店員から三度言葉が返ってくる。店員が三人いると九回「こんにちほ。」を聞くことになる。大勢の客の入る昼食時など、食べている間に何十回と「こんにちほ。」を聞く。一人として「いらっしやいませ。」とは言わない。なぜかといえばマニュアルの世界だからである。

ファックス、電子メール、携帯電話など、機器による情報伝達は、対面コミュニケーションから不対面コミュニケーションを生んだ。携帯電話の画面を見つめて顔も上げない人が電車の中に溢れる。音を出さなければいいと思っているのだろう。年寄りが目の前に立っていようと、そんなものは見えないのだから敬意表現以前の問題だ。

日本語教育の場合、教科書の中にも低学年から文化や風土の違いが明確に表れる。「春が来ました。四月の入学式の日、満開の桜の下、校庭に一年生が集まってきました。」という文ほど難しいものはない。構文は単純かもしれないが、南半球から来た人にとって春は九月であり、花は桜よりジャカランタかもしれないし、そもそも入学式が四月にある国は少ない。教師の説明のひと言が外国人児童をどれほど救い、同時に日本の児童たちに世界観を与えることができるか、教師の指導の価値がここにある。

最近では日本語のわからない児童生徒が日本の学校に入ってくることは珍しくなくなつた。外国人の集住都市ではクラスの十四パーセントが南米の子どもという所もある。日本の子どもの出生率が一・二九になったと新聞発表があったばかりである。二〇五〇年には日本人は一億人を切るだろう。異なる文化や価値観をもつ人たちが、この国の生産力を支えてくれることになるのかもしれない。多文化共生社会はもうすでに始まっているのである。

外国人に日本語を教えてみてわかったことは、異文化を尊重する中で、日本人が日本語・日本文化をいかに継承していくかという問題である。そして、日本人にとって、国語教育が単に国語という教科の中でのみ行われる教育ではなく、あらゆる教科の根底に基盤として存在するべきものであることを再確認したことである。